關西大學々報

大正十一年六月十五日創刊
昭和十七年十二月廿五日印刷
昭和十八年一月一日發行
編輯兼發行人　神戸數民
大阪市北區堂島上三丁目十五番地
印刷所　西大(72)谷口印刷所
大阪市東淀川區長柄中通二丁目十二番地
發行所　關西大學學報部
會員登錄番號二〇六〇〇四

大東亞戰爭第二年を迎ふ

昭和十六年十二月八日　長くも米英に對する宣戰の大詔渙發あらせられ、國家の總力を擧げて聖戰の目的を完遂すべき旨を昭示し給ひしより、既に一年と一ケ月の歲月を閲し、茲に大東亞戰爭下第二年の新春を迎ふ。緒戰以來御稜威の下忠烈なる皇軍將兵の敢闘は克く敵米英を制壓し、大東亞より其の據點を盡く覆滅するの大戰果を收め得たるは、新春を迎ふるに當り國民齊しく感激を新にするところである。

然れども戰爭の前途は長く我々は今徒らなる戰勝の安易感に捉はるべきではない。敵はその尨大なる物的優勢を恃み、我に一大反攻を企圖してゐるものの如くである。今次の大東亞戰爭はその性格に於て長期戰であり、總力戰であり、消耗戰であり、武力戰によつてのみその窮極の勝利が齎らされるものではない。敵米英を徹底的に破碎し、終局の勝利を確保する爲には國家の一切が戰爭目的達成に集中され、動員され、一億國民全部が米英擊滅の戰士として起たねばならぬ。武力戰はもとより生産戰、思想戰に於て彼を屈服せしめなければならぬ。今後益々一切の政府の施策が戰爭目的中心に强化せられるであらう。あらゆる戰時下の困苦と缺乏に堪へ、進んでこれに協力し、各々の戰域に於てその全力を竭すことが國民に課せられたる責務である。即ち我々は新年初頭に當り、益々その決意を固くせなければならぬ。

此の重大なる時局に際し暫く皇國民錬成の機關である學校について考へたい。國防國家の建設は必然的に教育國家の建設である。斯る見地に於て國民學校より大學に至るまで一切の教育機關を擧げて、教育の劃期的な刷新、即ち知的偏重を排して知行一如、知德體一致の教育の確立が要請されてゐる。最高學府たる大學は國民の最高錬成機關であり單なる學問研究に止まることなく、將來國民の中核として負荷の大任に任ずる資質の錬成を其の使命とするものである。斯かる刷新は教育者に對して學徒の指導者としての重大なる責任を要求する。教育者であり、學徒の指導者である限りに於て、もはや象牙の塔にのみ閉ぢ籠る事が許されない。指導者としての熱と信念とを堅持し、率先垂範、躬を以て若き學徒を率ひねばならぬ。斯くて總ての學園は今や學校長を中心に師弟同行全一體として戰場精神に徹せねばならぬ。翼に當局の慫慂に依つて各大學專門學校に於ける報國團の誕生、それを隊組織に編成したる報國隊の結成はまさに此の教育の劃期的革新に對應したものである。報國隊の結成は元氣旺盛なる學徒を國家の必要とする作業に、國土防衛に動員せんとするものである。それは國民の一人としての義務であると共に、教育の新しき觀念と矛盾するものではない。否斯くして共同的、實踐的なる心身の錬成がより以上に期待されるのである。

我等は新しき年を迎ふるに際し、刻下の非常態勢について深く省察し、國家の教育機關としての我が大學に課せられたる使命に挺身せなければならぬ。

第二百五號要目

大東亞戰爭第二年を迎ふ……（一）
東亞共榮圈の諸民族と國語……高橋盛孝（二）
時事雜觀……吉永登（三）
紹介と書評……菅守常（五）
學內報……（六）
昭和十七年執筆便覽……（七）
校友欄……（九）

東亞共榮圈の諸民族と國語

教授　高橋盛孝

事變前からいろいろの民族と接近して、その語を習ひ、邦語を教へた經驗から、私の見た諸民族の日本語について閑話を試みやう。

半島の留學生諸君の邦話は流石に一番うまい。たゞ清濁の區別がやゝ困難らしく、本等よませるとそれが我々の耳につく、漢文の讀み方等はよつぽどむつかしいらしい。朝鮮の訓讀法はほとんど棒讀にして語尾、句尾に少し尾鰭をつける程度である。例へば「太白豪氣 ituan 者 irōi 天子呼來不上船 hako」（崔氏「時調類聚」二二二頁）かういふ風によむと漢詩を作るときに便利だと云つてくれた留學生があつた。これは内地の漢學者の參考になる。琉球の訓讀の例が須藤氏譯ホール著「琉球探險記」に見える。

太白斗酒詩百篇
長安市上酒家眠
天子呼來不上船
自稱臣是酒中仙

Dihaku tushu shi hyakufing,
Choōan shishō shuka niburu,
Tinshi yubichitaro-tun funini nuburazi,
Midzikara shōshiru shin kuri sakiuchi nu shing.

支那の留學生に漢文を教へると意味はわかつてゐるのですが、讀み方が分りません」と云つた。なるほどさうかもしれぬ。「謀を帳中にめぐらし」云々を試驗に出すと帳を「かや」と譯した。無理もない。蒙古人の日本語はなまりが少い。ラ行で始る語がなくてロシヤをオロスと云ふ事等邦語の習慣に似てゐる。支那の「哦魯西亞」は多分蒙古人を通じて露西亞を知つた名殘であらう。大阪外語の蒙古語の先生エルデムバートル氏が「日本人に蒙古語を教へるとlの發音ができない。支那人に蒙古語を教へるとrの發音に苦しむ」と云つて居た。蒙古人の日本語は、すべて拗音がまづいのとe音が英語の發音記號のəの如く發音されるのが耳につく。「右ムコー右」「廻れ右マイヨー進め」と云ふ風に云ふ。ギリヤツク語には日本のン音があり、エスキモウには日本のラ行始聲に酷似したr音がある。しかし大體は北方言語の音韻組織は南方に比してはるかに複雜である。

馬來語始め、ポリネジア、メラネジア等の音韻組織は非常に簡單でこちらからも學び良いし、むかうから邦語を學ぶにも都合がよいと思ふ。しかし語序が大分ちがふから、單語だけなら世話はないが文章を學ぶ段になると、彼等が日本語を自由にしやべる迄には大分苦しまねばならぬ。

今の泰、ビルマ、カンボヂヤのクメル、シヤン、セイロン、古代のジヤワ、チヤム等の文字はそれぞれ相似て少しづつ異る。且ビルマ文字の如きは發音と相去ること甚だ遠い記號である。日本人には骨だ。たゞ日常の會話を理解する程度ならば素人にもさまで困難ではあるまい。新聞雜誌を讀みこなす迄には餘程の勉强がいる。彼等が日本語を學ぶにはどんな點が困難であるか、戰後日なほ淺く、私自身まだ彼等に接する機會を得ない。

日本語の改造も種々論議されてゐるが、これは無用の心配である。本當に日本に學ぶべきものがあるなら、こちらから催促しないでも、又どんなに日本語がむつかしくても、必ず研究してくれるものなのだ。從來も歐米の武官の中に熱心な日本研究家があつた。

今日の日本人の最も急を要する問題は、我が國の文化の向上と、禮節の實踐と、留學生に物質的な不便を可及的に感ぜしめぬやう努力することにあると思ふ。以上の諸點が等閑に附せられると留學生は日本へ來て却つて日本に愛想をつかすやうな結果になる。

（一七）八、二九）

時事雜觀

講師　吉永登

一

先日屆けられた東京の某私立大學の學校新聞に、近頃問題になつてゐる、字音假名遣改正に關する各方面の意見が掲載せられてあつた。「正論に聽く」の標題が附せられてはゐても、その解答がハガキで求められたらしい樣子であつたから、實は大した期待もかけなかつたのであるが、事國語に關する故もあつて、一通り讀ませて戴いたのである。

ところで此の字音假名遣に關しては私なりの考もない譯でもない。しかし今の場合、只里見弴氏の「世界萬國の言葉は、總てこれ自然發生と自然淘汰の途上にあると云つてよい。どこの國へ行つても、工夫改良の餘地のない、完全無缺な言葉といふのがあり得ようはずはないのだ。日本語もその尤なるものだから、これが改良を念とすること國民の――なかんづく文學者の當然なすべきことである。……だが……何も特に誰も彼も忙しいこの戰爭最中でなくてもよからう」といふお考へに、心から同意を表して置く。從つてその改正案が、當事者の多年に渉つての御骨折である事は十分承知してゐても、決して全面的に支持する氣持にはなれなかつたのである。

しかるに此の改正案に對する此等の意見に目を通して見て、異樣に感ぜられたのは、殆んどが反對論であつた事は止むを得ないとしても、隨分惡意に滿ちたものが多い事であつた。しかも其の何れもが抽象論であり、主觀論であつて、わけても「あるひは○○の手先となつて赤化道具に使用してゐる事も觀取せられ候」の如きは、筆者が相當地位のある方であるだけに、私を最も驚かせたのであつた。

曾て私は朝日新聞社が募集した「父よあなたは强かつた」の歌に關し、それが我國の醇風美俗を亂るものでありかつかゝる歌の流布をもくろむ新聞社は赤の手先だ、といふ意味の激越なパンフレットを間接ではあつたが送られた事があつた。もともとあの歌には歌謠曲特有の低調さと甘さがあつたとしても、そのあまりにも意外なのに啞然として二の句がつげなかつた事を記憶してゐる。

たとへ自らと意見を異にしてゐても同じく陛下の赤子たる同胞に對し、こともあらうにその存在を根本からゆすぶるやうな致命的慢罵を敢て浴せる事、果して日本人の血が通つてゐるのかと疑ひたくさへなるのである。もし又心から信じての言葉とするならば、それこそ影におびえる者で、その怯たる笑ふべきであらう。

由來我國は言擧げせぬ國と云はれてゐる。何故その本來の姿に立返つて、靜かに話さうとしないのか。話せばわかる筈のものが、如何に戰爭中とはいへあまりにも尖鋭化せられた現狀を遺憾に思ふのである。

二

野村・來栖兩大使の講演の要領を新聞紙上で拜見して、その氣魄と品位と更により以上、その豊富な內容に胸のすくやうな思ひがする迄、私の心を暗くしてゐたものは前日の某氏の講演であつた。二三語毎に聞える破れるやうな拍手は會場の熱狂ぶりを手に取るやうに傳へてくれても、私の心は必ずしもはずんでは來なかつたのである。子供を相手の話では決して相手を泣かせるなと云はれてゐる。子供を泣かせる事は雜作もない。しかもそれは一見効果的にさへ見える。其處に話し手の陷りやすい陷穽が存するのである。これとは多少の相違があつても、同じ事が大人に聞かせる話にも云へはしないか。聽衆の心を煽る、沸かせる、會場にあふれる興奮のどよめきは、如何にも話の成功を物語つてゐるかのやうである。しかもこんな時案外話の安易道を滑つてゐるのであつて、聽衆を甘く見思ひつきの連發に墮してゐなければ幸といふべきであらう。

云ふまでもなく、太平洋を大日本洋に改めよとの考へも結構には違ひない。が所詮それは氣の利いた思ひつきに過ぎないであらう。況んや數日前の新聞紙上の讀者欄にあらはれた「米に感謝せよと米を撃滅せよと云ふ運動が一緒に行はれるがやゝこしい。……そこで敵國アメリカンに迷利漢といふ字を充てる事を提唱する」に至つては、凡そこの戰爭が要求する逞しさや强靱さは微塵も認められない。其處にはたゞ神經衰弱的な潔癖性があるばかりである。これでは四十二の厄年も笑へないのである。

私は此の二つを輕率に因果の關係に於て眺めるものではない。それにしても指導者の言動の持つわづかの隙が、心なき者に思ひもよらぬ影響を與へる事、たゞ上の好むところ下之を好むに止まらぬ一つの例として取り上げられはしないかと思ふのである。

三

知人安武正道氏は朝日新聞にマレー語小話を連續して書いて居られる。ある日のそれにマレー語に於ては敬語が仲々複雜であるとの意味の事を書いて居られたのは興味のある事であつた。

丁度その頃私達は色々な機會に我が國の言葉の持つ特色である敬語について何かと聞かされてゐたからである。特色とは我國のみに存するといふ意味である事は云ふ迄もない。勿論多くの野蠻人の言語に敬語が存するからとて、輕々しい判斷は禁物ではあるが、それにしても次のことだけは云へようと思ふ。即ち敬語が日本語の特色であるためには、これらの語との間に十分の言語學的考察がなされねばならないといふことで、これなく徒らに自ら尊しと考へるならば、遠東の豕との譏を甘受しなければなるまい。

文部省の要目を見るに昭和十六年三月改正の國民學校令には「我國語ノ特質ヲ知ラシメ國語ヲ尊重愛護スルノ念ニ培ヒ其醇化ニ力ムル精神ヲ養フベシ」とあつて、まことに國語教育にたづさはる者の服膺すべき指示といふべきであらう。更に中學校令を見るにその「注意」の條に「話方ハ方言訛語ノ矯正明晰ナル國語ノ使用ニ習熟セシメ尚敬語ノ用法ニツキテモ適當ノ指導ヲスベシ」とあり、此處に初めて敬語の語が用ひられてゐる。しかもただ敬語とあるのみである。

勿論私達の國語に對するつながりは血緣的なものであつて、たとへ幾多改善すべき餘地ありとするも、これなくしては一日たりとも生を保つことの出來ないものである。ことに敬語の持つ謙讓と尊敬との念のつゝましい表現はたとへ他の言語にあらうがあるまいがそれ自體に於て絶對的と云ふべきである。以つて文部省の要目の精神をふみ越えた所謂識者のかうした見解も、たとへ英語、獨逸語等との單純な比較による結論であるにしても、其處には十分納得の行くものが感ぜられるのである。子供を見る母の慈目は、美しくこそあれ必ずしも無知とのみは却けられないであらう。にもかゝわらずそれは依然として同情的立場を前提としての理解である事を忘れてはならない。きびしい反省と自己批判のみから進歩は約束せられるのである。

學長　神戸正雄

報國

ふたつなきいのちも
たからもをしからす
わかおほきみのみためなりせは

敢闘

くにおこすつとめを
になふわかうとの
ゆめわすれめやまけしたましい

耐窮

くるしみにたゆる
ちからをやしなふは
みたみわれらのまことなりけり

四

この三つの事實を通じて私はしみじみ學問の貧困を考へさせられる。科學の必要を叫ばれること今日ほど大きい時はない。しかして科學は學問の世界に於ける一分野であり、從つて學問全體の協力なしにそれの成果は望み得べくもない。この事を銘記する時學問の振興こそ私達の追求すべき緊喫の目標の一つではあるまいか。「太田伍長の陣中手記」によれば故慶一伍長の遺言には「算之介、伸二共いかなる職業につくとも學問と藝術を愛する事を忘れざるやう訓育すべし」とあつたさうである。學問とはムツカシキ事ヲオボエル事、藝術とは美シキモノヲ弄ブ事と解する人は論外として、この遺言こそ銃後の私達への故人の誡告と聞くべきではなからうか。

最後に私は曾て讀んだ獨逸人アルベルト・シュヴアイツアーの言葉を引用することにしたい。

「奥さんよくお考へ下さい。この坊ちやんにもやがて無宗教の誘惑が來ます。かならず來る。それに對してあなたのやうな考へ方では對抗できません。合理的な思考と背馳するやうな宗教は青年に對して無力です。自分で納得の行くやうに考へ、それを信ずるのでなければ生きた信念とはなりません。福音の眞理を思考と引離して說くとき後年目醒めてくる懷疑にうち克つことはできません。いま自分が信じてゐることは自分が考へて自分のものとしたのではない――さういふ幻のやうな教理では眞實には堪へることが出來ません。その間に、かならず解決のできない疑惑がはいつてくる。――中略――

この後年の危機に對して身を護る力を與へるべく私はいま少年たちを教へます。少年たちのためには堅固な土臺の上に立つ「城砦を築いておいてやらねばなりません。いかなる惡に直面しても屈しないだけの、勇氣を作つておいてやらねばなりません。世界の現實を眺めても意氣沮喪せず、なほその中におのれが考へおのれが信ずる眞理を貫かうとする力を養つておいてやらなくてはなりません。――中略――

ことに坊ちやんが一人前の社會人になつた時の社會に對する考へ方としてはどこまでも自分の理性によつて考へ得た、しつかりとした確信を持つやうにしなくてはなりません。他からの命令によつて、宣傳によつて押しつけられて信じてゐる考へは外部から一押しされればくづれてしまひます。」

此の考への中には、歐洲人の傳統による特殊性もあり、且つ誰に向つて如何なる場合に發せられたかの詳しい說明を抜きにしては、正しい理解がむつかしいとしても、又取つて以つて他山の石とすべき教訓を含んでゐるやうに思はれる。（一二、一〇）

紹介と書評

教授　菅　守常

『河内先哲傳』土橋眞吉著

私たちの住んでゐる土地に、傑れた人々が住んでゐたと思ふ、急に今までと異つた緊張と喜びを感ずる。たとへば慈雲尊者が身近くにゐると思つてみると、その邊の空氣が急に和らかく、しかもきびしいものになり、私たちも思はず脊すじを正しく延ばして、正座せずにゐられなくなる。すぐれた先哲を身近に感ずることはこの上ない幸福な刹那である。この意味で土橋教授の「河内先哲傳」は大へん私たちを幸福にしてくれる本である。「紀州根來寺の常明僧正から地藏院流の祕奥を教へられた。」ただ淡々とした、この記述のなかゝら、私たちはそのときの色々の情景がしのばれて、長い間本を伏せて思ひにふけるのである。

私は本書によつてまた慈雲がカントと同年に歿したのを知ることが出來た。同じ時代に東西に二人の偉大な哲人が住んでゐた。相互に何等の觸れ合ふことなしに。しかもこの二人が私たちの頭の中に共に生きてゐる。これも精神の殿堂に參ずる後學のもち得る幸福の一つである。本書はまた私たちに慈雲の著者目錄を與へてくれる。私たちにとつてはこれも驚嘆の的である。

こころともしらぬ心をいつの間にわが心とは思ひそめけん

この歌も一度讀めば忘れられない歌である。この書の一頁一頁明けて見ると何か教はるものにぶつかる。書物の一頁々々から、バラ〳〵と寶石が落ちてくる感じだ。

長い間の史的研究の結果を私たちが、そつくりそのまゝ勞せずにいたゞいてゐるやうで著者に對しては何んとも御禮の申しやうもない氣がするのである。だがまた著者も序で「祕められた鄕土文化の高い香りと深い趣味とを鑑賞することは人生の至樂である。あたかも黎明の夏の曙、深山幽谷の隱れ沼に、美しい夢から醒めて微笑む睡蓮の花の香に陶醉する境地にも譬へられやう」と云つてゐられるやうにその長い間もまた美しい精神の蜜言の時であつたらうと思い、その幸福を羨しくも思ふのである。

本書は「近松と出雲の戲曲に、幽玄な宗教的情調が特に人を魅惑せしめてゐることを知らぬ者はないが、近松と出雲を宗教的に指導し、時に躬からその作品を添削し、或ひはその一齣を代作したりなどした」蓮體和尙、及び「契沖が古語古典を通して、わが國學の開拓者となつた偉業を知らぬ者はないが、契沖に語學、音韻を教導した先驅者の」淨嚴和尙、俳人で地誌學者の三田淨久、放浪の歌人今西行の以雲法師、詩人の名醫北山橘庵、一絃琴の開祖覺峰阿闍梨、幽棲の歌人岩崎美隆、憂國の儒醫小山陽柘植葛城についてのすぐれた美しい研究である。本書はつゝましく「河内先哲傳」と銘せられてゐるが日本精神史の一節を形成する貴重なる研究である。

『藝と文學』茶谷半次郎著

エッケルマンの「ゲーテとの對話」が私たちに對して持つ意味はきはめて大きい。ケーベルさんもこの本を「讀み終えた」と云ふことの出來ない本だと云つてゐる。傑れた人の傑れてゐる點がその日常生活の片鱗を通じて私たちの胸にしつくりとはまると云つた本だ。これと同じジャンルに屬する文學がどんどん出てくることを切望せずにはいられない。茶谷氏の「藝と文學」は丁度この私たちのこの願いを叶へてくれる本の一つである。「鶴澤叶・聞書」「船場今昔」「志賀直哉メモ」「武者小路さん」からこの本は成り立つてゐる。

「鶴澤叶・聞書」はその藝道の苦心について色々のことを後世に遺す意圖の外にこの中には實に微妙な、大阪辯が實に深い神經をもつて保存されてゐる。茶谷氏は藝談の外に正しい上方言の傳統をも遺さうとする祕められた意圖をもたれたのであらう。

志賀直哉メモを私は愛讀する。

「文章といふものだけを切り離して、その面をどこもかも、つるつるなものにするのに苦心する、それも厭だね。何か内からそれを突き破るものがあつてほしい」

「小說として僕の一番嫌いな缺點を持つてゐる。ときどき嘘が書いてゐる。嘘といふのは、つまり文章の調子で生れて來た嘘が書いてあることなのだ」

こういふ作家のまことが私たちを深い沈默におしやる。武者小路氏もこの本の序文で云つてゐる。

「茶谷君は聞書以外にも面白いものがかける人とも思ふが、聞書をかく方にも、殊に性質も、才能もむくやうに思ふ。今後もこの特別の才能を生かし、大阪と云ふ特別の土地で書き殘してもらいたいものが澤山あるやうに思ふ……茶谷氏の誠實な性質で熱愛する藝術の記錄を殘すのは、現在の人を喜ばすと同時に後世の人を喜ばすことになりはしないかと思ふ」

いや、たしかに後生の人をよろこばすにちがひない、作者の意企もそこにあるのだ。

日本出版文化協會　推薦圖書（第十三回拔萃）

○世界史の哲學　高山　岩男著
A5五三九頁四・五〇　岩波書店

○宇宙と光　堀　健夫著
新書二四〇頁〇・五〇　岩波書店

○内閣制度の研究　山崎　丹照著
A5四五二頁三・五〇　高山書院

○伊藤左千夫　齋藤　茂吉著
A5五一二頁四・五〇　中央公論社

○支那文學藝術考　青木　正兒著
A5四七四頁五・五〇　弘文堂書房

學内報

詔奉讀式を擧行、正井專門部長の訓話ありて感激を新にし、必勝の信念を堅固にした。

冬期授業日程

	授業終了	授業開始
學部	十二月十九日	一月十一日
豫科	十二月十六日	一月八日
專門部一部	十二月廿四日	一月十一日
專門部二部	十二月廿四日	一月十一日

尙豫科は十二月十七日より廿二日まで中間考査を實施す。

大詔渙發一周年記念式

米英に對する宣戰の大詔渙發あらせられてより一周年、十二月八日の記念行事は、學校報國隊大阪地方部の主催にて大手前公園において開催された。當日午前九時開會、宮城遙拜、默禱、國歌合唱の後、植本地方部長の宣戰の大詔奉讀について地方部長の訓辭あり、學生生徒代表の宣誓、萬歲を奉唱して閉式、それより歩武堂々分列行進に移り、本町筋より御堂筋を北へ淀屋橋に至る間戰時下若人學徒の軒昂たる意氣を示して終了、本學學生生徒は豐國神社に參拜し、必勝の新願をなし、强歩行軍を以て歸學した。

尙專門部二部にては午後六時半より大

人事異動

補專門部長　教授　正井　敬次
補圖書館長　教授　岩崎　卯一
（以上九月十六日付）
任書記　書記補　吉岡　嘉裕
（以上十月一日付）
囑託本學講師　後藤　敏雄
囑託本學講師　上野　照夫
（以上同月十二日付）
依願解職　關甲教諭　中田　孝三
（以上同月廿二日付）
囑託本學講師　田中　明親
（以上同月廿九日付）
依願免生徒主事　教授　安川安太郎
兼任專門部生徒主事　教授　柳瀨　兼助
（以上同月廿一日付）
免大學豫科教練教師　教練教師中村虎吉
命關西甲種商業教諭
（以上十一月十二日付）
囑託本學講師　岡田　辰三
囑託本學講師　阿部　清
教練教師　岡　翠
任大學豫科體操教師兼學生主事補
命團體訓練勤勞作業、報國團等ノ事務擔任
命學部教務課勤務　書記　若松　新吾
命專門部教務課勤務　書記　田中　佐雄
命會計課勤務（天六學舍）書記　吉岡嘉裕
書記　髙島　義一
命庶務課兼會計課勤務（千里山學舍）
（以上同月廿六日付）
永井　量一
任書記命會計課勤務（天六學舍）
（以上同月廿日付）
依願免經商學部長　教授　磯部　喜一
補經商學部長　教授　河村　宜介
（以上十二月三日付）

研究論集執筆者決定

研究論集第十三號は法律政治篇、經濟商業篇、文學哲學篇とも執筆者決定、來る二月中旬發行の豫定である。

執筆者並に論文題目は左の通りである

題未定　教授　安藤　光
東亞國際法の基本問題〃　川上　敬逸
嫁資について　〃　木村　健助
商法第百八十八條註釋〃　國藏
帝國憲法の本質　〃　吉田　一枝
權利主體　〃　和田　豐二
經濟・商業篇
滿洲國の交通　教授　河村　宜介
經濟資源と戰爭經濟　〃　中川庸太郎
東亞民族の風土的背景〃　中村良之助
大東亞經濟建設と資本統制　〃　三木　純吉
東印度會社による印度統治　〃　矢口孝次郎
文學・哲學篇
キエルケゴールについてのノート…　〃　菅　守常
Ｇｅｎｅに就いて　〃　八島　治一
チョーサー「騎士物語」（二）　〃　廣瀨　捨三
歷史的世界と世界史的歷史　助教授　西井　克己

德尾教授陣歿

本學教授陸軍中佐德尾俊彦氏は昭和十三年八月應召以來篠山聯隊銃砲部隊長として部隊訓練に精進せられること二年、大阪師團教育隊長に轉じ、間もなく佛印に派遣せられ澁田特務機關の庶務課長を經て日本大使府陸軍部隊付として活躍中、去る十月二十九日飛行機事故の爲突如陣歿せられた。遺骨は十一月廿五日無言の凱旋をなし、同廿七日午後一時より西宮の自宅に於て葬儀を執行、午後二時より三時迄一般告別式あり、各方面より贈られた供花、弔辭は氏の生前を偲ばしむるものあり、本學よりは學長初め教職員學生生徒參列盛儀を極めた。

がくほう抄

内藤正剛理事嚴父　理事内藤正剛氏嚴父良治氏は十二月九日大阪市外岡町の別邸にて永眠せられた。享年八十四。

桑谷忠治講師　十二月九日逝去、同十一日午後一時より二時迄住吉區田邊本町六ノ四七の自宅に告別式を執行せられた。

昭和十七年　執筆便覽

排例は法政・經商・文哲の五十音順
單行本はゴチック体を以て表はす
調査漏れにて未收載の分は乞御諒恕

岩崎　則一

（國家本質論研究）

國家現象の社會的理解　A5一五四頁

國家の團體性　A5二二七頁

七月刊　弘文堂

國家研究の立場　關大研究論集十二號

法政篇

世界史の一轉換　學報　一月號

文化の國民性と世界性　學報　六月號

植田　重正

財産罪の構造　關大研究論集十二號

法政篇

川上　敬逸

帝國の秩序中立と秩序戰爭の論理と限界　外交時報　二月號

共榮圏を繞る國家主權の諸問題　外交時報　七月號

戰爭法思想の點描　外交時報十二月號

東亞に於ける九國條約の地位

國際關係研究會編『東亞に關する條約と外交』所收　大東書店

中谷　敬壽

言論・出版・集會・結社等臨時取締法について　公法雜誌　八卷二號

行政處分の瑕疵について　關大研究論集十二號

法政篇

法律思想史の檢念及性質について　公法雜誌八卷十二號

數府縣に亘る町村の境界論爭と知事の出訴權及び内務大臣の指定　公法雜誌　八卷一號

無記名投票制度と投票の調査　公法雜誌　八卷二號

死者に對する訴とその判決の相續人に對する効力　公法雜誌　八卷二號

所得金額の決定と株式配當取得の歸屬　公法雜誌　八卷三號

市町村吏員の賠償義務と市町村の損害　公法雜誌　八卷四號

選擧人名簿に登錄すべき範圍、市會議員候補者の被選擧權有無の決定者　公法雜誌　八卷五號

金融業許可の範圍、經過と既得權　公法雜誌　八卷六號

無權利者に爲したる郵便貯金拂戻の効力　公法雜誌　八卷七號

商品の混同と商標の類似との關係　公法雜誌　八卷九號

町村稅漁業稅附加稅の對象同稅の課稅權者　公法雜誌　八卷十號

共同鑛業權者に非ざる者を對象とする差押の効力　公法雜誌八卷十二號

大東亞戰爭と我等の覺悟　學報　一月號

野村　次夫

統制經濟法令に於ける「販賣」の意義　關大研究論集十二號

法政篇

企業許可令と商法　銀行論叢卅八卷六號

權利株讓渡の新商法施行後の効力　銀行論叢卅八卷一號

株券の善意取得者と未成年者保護規定　銀行論叢卅九卷二號

定款に記載すべき發起人の氏名住所　銀行論叢卅九卷五號

福島　四郎

家督相續人の廢除の本質　關大研究論集十二號　法政篇

柳瀨　兼助

佛蘭西民法財産取得篇（外國法典叢書）

木村教授共同執筆　三月十二月刊

有斐閣

本議會の民改正要綱に付て　銀行論叢　二月號

委託又は郵便に依る戸籍届出に關する法律と同意の附記の委託〃三月號

認知者死亡後の認知無効の主張〃七月號

改正民法をめぐる若干の問題　關大研究論集十二號

法政篇

吉田　一枝

帝國憲法の根本精神　公共雜誌　三月號

帝國憲法の根本精神（日本諸學振興會報告十四篇「法學」所收

五月　文部省教學局

社會政治情勢の推移要請により帝國憲法の規定する意味を變更すること可能なりや　大阪學士倶會報九、十月號

帝國憲法解釋への一考察　關大新聞　十一月號

報國團彙報

學部報國團

▽軍役奉仕―十一五日は三年生、同廿七廿八、卅の三日間は二年及一年學生の○○に於ける軍作業に從つた。

▽剛健旅行―十二月十四日箕面勝尾寺より余野街道を能勢妙見に二十キロの行程を踏破した。

豫科報國團

▽軍作業―十二月一、二、三の三日間○○の軍作業に從事した。

▽勤勞作業―十二月八日、大阪奉國隊本部主催行事に參加以外の生徒は豫科農園に於て勤勞作業に從つた。

專門部一部報國團

▽幹事修練會―十一月廿七、八の兩日洛西嵯峨の天龍寺に於て禪行を修した。

▽軍作業―十二月四、五、七の三日間國民勤勞報國協力令により軍作業に從事

▽勤勞作業―十二月九日（商一）、十日（法一、十一日（經一）、十二日（商二）、十四日（法二）、十五日（經二）、十六日（商一）の七日間翼賛會滯貨一掃作業に勤勞奉仕をなした。

專門部二部報國團

▽修練旅行―十一月廿二日奈良西郊の皇陵史跡を歴訪參拜し、薬師寺に於て、校友溝邊文和氏の臨地講演を聽く。參加者約八〇〇名。

▽幹事修練會―十一月廿、廿一の兩日吉野に於て開催、神宮參拜、皇居趾美化作業を實施し、講演に、見學に吉野朝思想の體得に力めた。參加幹事三十七名。

神戸正雄

戰爭と增稅　統制經濟　一月號

大東亞戰爭と經濟建設　經濟論叢三月號

磯部喜一

中小工業統制組織　A5四八〇頁　十二月刊　有悲閣

本邦固有の中小工業への反省　社會政策時報二月號

台灣產業論　關大研究論集十二號　經商篇

南方經濟建設と貿易人選出の是非論　綿輸月報　七月號

綿スフ統制令に望む　織布　十一月號

宣戰布告されたる日の感想　國民評論　一月號

工業組合の將來と中小工業　山中等太郎篇『**中小工業の將來性**』所收、三月刊　有悲閣

拙速と巧遲と　日刊工業新聞

會社銀行に求む　同

南方資源對策の素描　同

轉業對策としての教育資金　同

ハイキングによる食糧蒐集　同

河村宜介

大東亞共榮圏建設と交通問題　關大研究論集十二號　經商篇

中川屑太郎

實踐經濟學の問題　學報　十月號

中村良之助

南方開拓について　學報　二月號

雲南チベットの道　學報　十一月號

圏と境界の問題　地政學　五月號

ドイツ東方政策の歐洲分界作用　地政學　十月號

黑海及びカウカズ地方が歐洲新秩序に占むる地位　關大研究論集十二號　經商篇

スターリングラード地圖の僞瞞　大阪新聞

カウカズ四篇、スエズ運河の意義　大阪新聞

世界の現狀に對する二つの詩風　はごろも學藝

正井敬次

國民經濟組織論（國民經濟原論）　A5二二一頁　五月刊　大同書院

大東亞當面の經濟國策　學報　二月號

三谷友吉

ボエーム資本利子論の研究　A5　三四頁　五月刊　大東書館

三谷道麿

財政學　A5二六八頁　四月刊　澤田書店

最近に於ける支那の財政に就いて　關大研究論集十二號　經商篇

森川太郎

決戰體制下に於ける通貨金融政策　財政　二月號

通貨管理の新任務　銀行研究　三月號

貨通管理の戰時方策　エコノミスト三月號

南方開發金融の理論　財政　七月號

金融統制と銀行制度　銀行研究　八月號

我國銀行統制の進展　關大研究論集第十二號　經商篇

經濟統制と貨幣　商業組合　十一月號

矢口孝次郎

イギリス政治經濟史（初期王政と重商主義）A5二三一頁　十二月刊　同文館

イギリス帝國主義の特質　關大研究論集十二號　經商篇

東亞に於ける英文化の崩壞　學報六月號

岡本勝治郎

廟制考（其の二）　關大研究論集十二號　文哲篇

片岡甚太郎

英文法概論　B6二〇〇頁四月刊關西堂

苦悶する現代英文學　關大研究論集十二號文哲篇

中世英文學の地誌學的考察　英語教育　十一月號

菅守常

師と弟子　關大研究論集十二號　文哲篇

文化の自立性についての一考察　學報　六月號

高橋盛孝

樺太ギリヤク語（大東亞語學叢刊）B6　二七〇頁十月刊　朝日新聞社

苗族箚記　關大研究論集十二號　文哲篇

武內省三

ニイチエとシエーラー　關大學研究論集十二號　文哲篇

西井克巳

フイヒテに於ける National なもの　京大西洋史研究室編『**西洋史論苑**』　目黑書店

廣瀨捨三

カンタベリ物語序の歌　關大研究論集十二號　文哲篇

三枝樹正道

教育現象に於ける權威　佛專學報十一月

日本出版文化協會 **推薦圖書**（第十三四回拔萃）

○回教概論　A5二五八頁三・〇〇　大川周明著　慶應書房

○フイリツピンの自然と民族　A5六一一頁六・五〇　太平洋協會編　河出書房

○日本人を主とした人間の遺傳　B6二三二頁二・〇〇　駒井卓著　創元社

○標準上原マレー語（全四卷）　A5各回平均三〇七頁二・三〇　各扁　上原訓藏著　晴南社

○釣（創元選書九四）　B6二九一頁一・八〇　佐藤惣之助著　創元社

○日本工業史　B6四一九頁三・〇〇　南種康博著　地人書館

○風土記抄　A5四〇四頁三・八〇　肥後和男著　弘文堂書房

○渾齋隨筆　B6二八二頁二・五〇　會津八一著　創元社

校友欄

昭和十七年度 校友總會並に評議員會

昭和十七年度校友總會並に評議員會は十一月廿九日大阪市大手前「國民會館」において開催した。總會に先だち評議員會を午前十時半より同會館小講堂に開催森川常任幹事司會にて、國民儀禮の後、會長神戸博士の挨拶、森川常任幹事より本年度の本會事業並に會計報告あり、滿場一致承認の後議事に入り、午後の總會の打合せをなし、ついで吉田理事の母校の近況報告あり、評議員より母校今後の計畫、經營方針等につき質問に率直なる回答あり、忌憚なき意見の開陳、建設的なる意見續出し、活潑なる應酬ありて正午閉會した。

校友總會　引つゞき午後一時半より大講堂に總會を開催、三島常任幹事司會の下に國民儀禮、國歌合唱の後、會長神戸博士の挨拶並に母校の近況報告、森川常任幹事の昭和十七年度事業並に會計報告、矢口專務理事の母校教務報告ありて會員所感に移り、阿部甚吉、春原源大郎松本茂三郎氏より母校愛に燃ゆる熱烈なる建設的意見は會員の肺腑をつき、松本氏の動議にて、母校發展を期する目的を以て委員を擧げて、調査研究、進言、諮問に答へることとし、委員の選出、員數は松本茂三郎、高梨乙松氏に一任と決定した。

ついで議事に入り、評議員改選の件は會長一任となり、終つて學歌合唱、聖壽萬歳奉唱して大會の幕を閉ぢ、それより映畫配給者の好意による映畫の上映に移り、最新日本ニュース、獨乙ウーハー社の文化映畫「緣の放浪者」松竹特作「十日間の人生」を鑑賞して意義ある昭和十七年度總會を終了した。

昭和十七年度校友會事業並に會計報告

本年度の事業並に會計報告に先立ち、本會の概況を申上げます。

昨年十一月千里山學舍に於て校友總會開催後、十二月には一一三五名、本年の九月には一一九六名の新會員を迎へまして會員總數二萬三千の多數に及びます。然して本會役員は昨年總會に於て會則一部の改正により評議員二百名、それに支部長が評議員と云ふ譯でありますので二百數十名と云ふ事になります。その中京阪神在住評議員中五十名が常議員として會務を審議し、その常議員中より十名が常任幹事として會務を處理してゐる次第であります。支部の數は昭和十三年本會確立の際に十五支部でありましたが、現在は四十となり、內地は元より朝鮮、臺灣、滿洲、支那、蒙古の各地に支部設立され、殊に外地の支部は活躍顯著と云ふ現狀であります。

次に本年度の事業でありますが、事業開始の直前　畏くも米英に對する宣戰の大詔渙發され、國を擧げて大東亞戰爭完遂に傾倒の爲本會事業もその影響を見るのであります。先づ第一に支部の新設でありますが、南京支部が四月廿六日に、北海道支部が十月十七日に設立されました、本年度の新設支部は以上二支部であります。

第二に講演會並に座談會であります。三月廿一日に本間俊平氏を聘して「皇民の使命」と題して天六學舍に開催しました。又五月十五日には今年の國會議員改選に際し、芽出度當選された新代議士を天六學舍に招待し、その抱負を聽くの座談會を開催しました、當日出席された代議士は大阪の大川光三、田中藤作、高梨乙松、滋賀の信正義雄の四氏でありました。次に六月廿九日には京大教授羽溪了諦博士の「一如と對立」十月廿六日には本學川上敬逸教授の「危機の國際法と其の將來」中村良之助教授の「重慶より西藏雲南を越ゆるルートの問題」と題して共に天六學舍に講演會を開催しました。詳細は既に學報誌上で御高承の事と存じます。

第三に會員名簿の發行であります。本年は用紙の入手難等の事情もありましたが、六月に發行致しました。A五判五二〇頁の大册であります。內容は努めて正確を期しましたが、何分二萬以上の多數の會員の事でありまして、消息不明の向もあり、住所職業の異動もあります。各位の御協力によりまして今後正確を期したいと存じます。

次に會員の慶弔に際しましては、祝詞弔辭、弔問等敬意を表する事に力めて居りますが、行屆かぬ點もあり、又消息の不明な場合もありますので、御當人からは本會宛御通知願ふ樣に、又御存じよりの會員は本會に連絡願ふ樣に御依賴致します。

尙又戰線に出征されてゐる會員は相當の數に上つて居ります。之れ等の各位には、月々學報を發送してゐますが、宛名部隊名の判明せぬ向もあります。今後是非洩れなく致したい存念であります。

以上は本年度事業の大要でありますが今後に於ては、內的充實を期すると共に地方支部と連絡の上、講師を派遣して講演會を開催致したり、從來屢々懸案となれる學長を主班とする外地支部訪問等はぜひ實現して、母校關西大學の發展に積極的に寄與せんとする意向であります。何卒各位の絕大なる御協力御支援をお願ひ致します。

次に會計報告でありますが、昭和十六年一月より同十二月末迄の決算報告を申上げます。

收入の部に於て會費收入は一三、八七五圓、第三回總會費五〇五圓五〇、利子五八圓七七、雜收入一圓、計一四、四四〇圓二七にて前年度繰越金一、九六九圓六〇

を加へますと金一六、四〇九圓八七となります。支出の部に於て雇員諸給費一、四三三圓三二、備品費一五五圓七〇、消耗品費一三四圓、通信運搬費一、五一二圓二五、印刷費六八二圓、名簿代二、二二二圓七五、學報代一、九五一圓〇七、會誌費一、〇四〇圓四〇、雜費九九圓七二、第三回總會經費一、〇七七圓三一、講演會費八三圓三〇、合計一〇、三九一圓八二、差引六、一八圓〇五次年度繰越と云ふ事になつて居ります。

以上をもちまして本年の事業並に會計報告であります。何卒御承認をお願ひ致します。（拍手）

大阪支部

○秋季總會　錬成の秋、大阪支部秋季總會は十一月十五日（日）箕面、寶塚方面に開催した。秋色深き箕面公園より能勢の錬成コースを先づ渉破するものもありて午後三時清荒神に參集、大東亞戰爭必勝祈願の後、折から境内に展覽中の雜新の志士高岡鐵齋居士の遺墨を鑑賞し、それより寶塚「相生樓」にて五時より總會開催、内藤支部長より母校の近況會務の報告ありて關宴、午後七時盛會裡に終了した。

當日の出席者―今田光匡、一海景宥、生島藤藏、馬場弘道、橋本鹿藏、西本寛一、西原新太郎、栩木浩嚴、鳥羽源四郎、富田仲次郎、遠部逸太郎、岡本義男、笈西大次郎、桂忠雄、河村宜介、可野敬四郎、神屋敷民藏、樫本信雄、吉村種藏、吉田音松、吉田一枝、吉川芳三郎、田中健三、竹西宗助、高仲次郎、辻本幸信、内藤正剛、中務平吉、中根竹藏、永井量一、中村岩見、中村長之助、中塚勝治、浦田豊、梅原貞次郎、植田完治、野崎勇二郎、矢口家治、山根龍藏、八木萬太郎、山崎敬義、松本標四郎、正井敬次、松本芳太郎、松原健一、深川重義、藤原光治、小泉幸治、見玉善吉、渥美元次郎、阿部甚吉、菊池金次郎、岸本芳夫、三浦三郎、水谷揆一、三島律夫、志野覺治郎、神保敏男、下島光、森下龜太郎、森内梅吉、森芳松、杉木信雄、鈴木武雄、角田好太郎

東京支部

秋冷の十一月二十六日午後五時半より日本橋區濱町日本橋倶樂部に於て東京支部總會を開催、國民儀禮の後會食。

食後自己紹介と希望並に其從事せる豊富なる體驗談時局談あつて興味津々たるものであつた。終つて松澤支部長よりの東京支部校友會の發展策に關し所見を求めたる所各自愛校の精神より熱烈なる意見を吐露され胸襟を開いて懇談し盛會裡に散會したのは午後九時半であつた。

當日出席者は左の通り

安藤藤綱、福田繁芳、山口直三郎、松澤卓規、尾關義一、大村喜覺、中村峰藏、諏訪富三郎、中村簡吉、大月義平二、渡邊義衛、藤田圭亮、米田忠八、平井正義、中山幸市、加邊力、住谷卓雄、古田吉五郎、北野繁太郎、三森武雄

京都支部

大東亞戰一週年を迎えた十二月五日午後五時より河原町桃園亭に於て秋季懇談會を開催した、母校より神戸學長、岩崎卯一教授、神屋敷學報主任出席され、卓を圍みて母校の近況を聽き、學園の思出咄盡きぬ歡談をなし、大いに舊交を温めて七時過ぎ盛會裡に散會した。

出席者―荒賀勝平、岡田實之、越智仙助、岡田誠一、北野重治、小阪米男、高久直信、竹中信次郎、利根川良彦、中野一男、西垣友夫、西野富藏、平田親勝、平林武雄、松室忠夫、松本健吉、南幸治、森福太郎、安田義哲、山口多賀藏

芦屋支部

十一月十五日十四時より當支部秋季總會を竹井小野右衛門氏邸で開催、此の日母校より森川教授及び神屋敷學報局主任も早刻より出席下され先づ一同打揃つて芦屋天神社に參拜嚴肅に必勝祈願と皇軍の武運長久とを祈願し歸つて總會を開催す、最初竹井副支部長の挨拶に引續き森塚氏會務の報告をなし役員任期滿了に付改選を行つた、それより森川教授は母校近況の概要を懇切に話され一同謹聽せり次いで懇談會に入り一同祝杯を擧げニュース入りの自己紹介をなし時局談から母校の今昔校友の進展と壯談歡話の續出に又竹井夫人の心盡の御料理頻出に時の經過も知らず一同和氣藹々の裡に散會せしは二十一時を過ぎし頃なりき。

役員改選の結果次の如し

支部長　竹井小野右衛門
副支部長　塚本猶治郎　森塚圭城
幹事　丹羽英夫　中島定五郎　戸根泰雄　酒井政之　法西榮次郎
會計　山村松廣

出席者―森川太郎、神屋敷民藏、松本一夫、酒井政之、山村松廣、山村鶴千代、丹羽英夫、伊藤正紀、戸根泰雄、法西榮次郎、竹井小野右衛門、塚本猶治郎、森塚圭藏

秀麗會（關東州支部）

十月廿三日午後六時より大連亭に於て秋季總會並に秀麗會第七十八回例會開催、高濱支部長は風邪臥床中であり、木村、川野、竹若氏は内地出張中、秀島氏は入院中と云ふ狀態で會する者は十五名であつたが實になごやかな而も滋味津々たるものがある。

議事二、三を終了し、次期幹事を、山下三郎、竹若隆三、貴村一雄、小川立朝の四君に、尚會員名簿作成する事に決定、八時四十分學歌を高唱して散會した。

出席者―室山宇太郎、守谷賢治、加來茂彦、黒田健勝、池内輝一、山下三郎、萩原博、高階一三、松田久雄、北條茂義、豊永吉廣、永田淺雄、貴村一雄、小川立朝、平井三朗

姫路支部

總會開催　十一月廿九日午後二時より「三松」に於て開催、支部長長谷川安治氏逝去により滿場一致、堀田秀次氏を推し、副支部長には吉松須賀根、田中吉次郎の兩氏就任、事務所を姫路市西新町一三七、田中吉次郎氏方に置くこととなり會則等の審議決定の後、今後は他支部に呼應して母校發展の爲結束を固めることを申合せた。

朝鮮支部

十一月十三日午後六時から京城府黃金町一丁目雅叙園で秋季總會を開催、野田幹事長六時二〇分開會を宣す國民儀禮の後岡本支部長旅行缺席に付代つて太宰顧問の開會の挨拶あり、引續き開宴一同歡談の後信田顧問の發聲で母校の萬歲を三唱して八時すぎ散會した。

當日の出席者次の通り（順不同）

野田博、太宰明、松村作二、稻垣鐵五郎、牧野秀夫、木村富士、桂定一、信田芳、森岡正典、都築泰二郎、大川正雄、善谷昌健、岩崎義二、中條得一、吉本肇、小野田一正、奥野弘之、島田晃、清水辨二郎、曾根三郎、浦川梅造、川島通利、森本定雄、今戸正之、鈴川勳、江藤榮七、佐竹圭介、田村格治、海野美代市、尾原東成、山田壽男、吳健一、小西直意、伊藤祐一、近藤薫、村上三政

▽第二十二回　神宮參拜　十一月一日（第一日曜日）午前七時半集合、前月に比べて多數の參加者だ一同參拜を終つて南山亭で喫茶する、この日山下喜代志氏の初參加の挨拶あり岸本忠雄氏の訣別の辭あり、又北支視察の歸途兵庫縣西宮支部長の志野覺治郎氏の參加もあり、次いで松田清氏は母校武田博士著「風樹の記」中全夫人の筆になる「武田家の人と爲りて」の結語に示された歌

我が餘生あだには出來じ神と人の
あつきめぐみに思ひ及べば

に感あり、詩情に驅られて岸本氏の訣別の歌と共に次の通り自ら朗詠せられ深き感銘を與へられた。

同窓の親しき君を送るべき
吾等の心如何に寂しき

志野氏を迎へて

はからずも君を迎へて語りつる
今朝の集ひの樂しくもあるかな

かくて岸本、志野兩氏の歡迎をも兼ねて有意義に九時前に散會した。

當日の參拜者氏名は次の通りである（順不同）

岡本至德、岸本忠雄、志野覺治郎、松田清、松村作二、野田博、伊東祐一、鈴川勳、田村格治、川島通利、鈴川潔、吳健一、村上三政、近藤薫、曾根三郎、高橋伊平、山下喜代志、山田壽男、信田芳、小西直意

奉天支部

十月々例會――本月の例會は十月二十六日午後六時半より例により明治製菓グリルにて開催、本日は校友中黑田、金原寺町（不參）中村（不參）辻、五島の諸氏の子女出産の御祝として寸志を贈呈し終りて直ちに中村義雄氏の玉翠に於ける招宴に一同出席し中村氏代理の堀口氏の挨拶、增谷支部長の謝辭の後盛んなる宴に移り自己紹介、かくし藝に花を咲かせ最後に學歌、愛國行進曲を齊唱して閉會した時は九時半であつた。

當日の出席者は

增谷、出井、三木、多久、黑田、五島中元、直吉、上岡、岩戸、柏木、越智浦谷、金原、松下、松本、山下、堀口辻、北條（大連支部）

南京支部

秋季總會　十一月二十六日午後六時大東亞建設翼業の中樞都市、首府南京暮色に包まれて眠るが如き、夫子廟豪壯をもつて誇る、六華春の一角に散々伍々に相集へる校友先輩諸氏、相會して共に語るはかつての樂しかりし懷しの學窓生活の想ひ出、定刻江口支部長立つて開會の詞を陳べられし後今回特に遠來の大日本相撲協會力士諸氏中往年關西大學相撲部大立物山錦關の愛弟子大和錦關、十三錦關を迎へて共にこの總會を祝ふ。尚今度總軍司令部へ榮轉の先輩梅田茂氏を紹介後開宴、六華春特有の中國料理の進むにつれ大和錦關の角道祕話、梅田氏のかつて華やかなりし學窓生活、革新時代の苦心談、江口氏の戰陣談と話題は次から次へとなごやかに進む實に面白く愉快に時刻の過ぎ去るも忘れる程、午後十時頃有意義なりし總會も懷しの學歌學生歌を合唱して再會を確約の後閉會を宣す

主賓――大和錦關、十三錦關

出席者――江口透支部長夫妻、梅田茂、富田英雄、富口孝司、水門次作、赤座兵衛

上海支部

母校創立の佳き日十一月四日は赤當支部恒例の秋季總會の日に當る。

豫定通り當日は一八時三〇分より日本倶樂部二號室に於て開催した色豐かに競ふ菊の薫に淨められ一同國民儀禮を行ひ支那料理の卓を圍んで宴に入つた劈頭辻野幹事長より今期事務報告があつた。先に幹事會に於て假承認したる支部長辭任の件に付き忽那氏の指名に依り次期支部長に辻野氏を又幹事長に大森氏を推薦せる處一同此れに贊成せるを以て兩氏共受諾せらる。辻野、大森兩氏交々立つて新任の挨拶をなし、其他の幹事は其儘留任して頂く事になつた。

席上支部員河田千代治君が內地に於て永眠されたる由の報告あり直ちに支部哀悼の意を表する事に決議し、先に表忠塔奉仕作業實施をなすや卒先此れに參加せられた際の記念寫眞をも遺族に御贈呈する事として萬事大森幹事長に一任した。

かくて數時を有意義に過して二十一時兩陛下と母校の萬歲を唱和して散會した。

會員消息

氏名下の數字中、漢字は大正年數、算用數字は昭和年數を16前は三月、16後は十二月卒業を示す、又括弧内にある消息は業務動靜

大法

板垣 進吾（16前）奉天市敷島區協和街三段一九號
今井 盛五（16前）新潟縣佐渡郡眞野村新町
畝田 耕一（14）莫大小中央配給統制會社大阪支店）
川村 大郎（17）京都市下京區吉祥院石原長田町一三 東亞麻工業會社京都工場内
木村 基（10）東區北濱四ノ四三、岩井商店機械課）
小阪 米男（8）京都市東山區山科日岡九條山東谷町一七（島津製作所伏見工場）
佐伯 憲三（13）北區龍田町四三
重田 政次（6）臺灣高雄州岡山郡燕巢庄阿介店溪治水工事所内（臺灣總督府國土局）
杉山 武一（5）東淀川區十三東之町二ノ一三四
田中 直行（11）北海道空知郡三笠村幾春別、住友奔別鑛業部内
田邊健四郎（6）東成區片江町三ノ六一
高橋 正實（9）東淀川區新高南通三ノ一（牧場經營）
德永 憲一（15）住吉區西長居町四一〇ノ一
西島 政治（9）札幌市岡山南二條四ノ三七
野口 武男（9）（久留米師團經理部少佐）
原田 年夫（12）（臺灣總督府交通局鐵道部運輸課）
福井 秀臣（12）旭區江野町一八ノ二（三和信託會社）
福井 治平（7）北區堂島中一ノ三（聯合紙器會社庶務課）
藤野末五郎（15）朝鮮忠清北道沃川郡青山面芝田里
藤本 明（13）新京興安大路陸軍官舍七三ノ二、押柄方（司法部刑事司檢察科）
向井 裕亮（10）（兵庫縣食糧營團）
村上伊三雄（7）廣東市西濠二馬路二六昭和通商會社内（同社）
山田 巖（5）尼崎市蓬川區北灘波町四五九

大政

朝倉 成萬（17）浪速區立葉町一三〇〇尺一製作所營業部）
江本 逸三（16後）住吉區橋本町六七（北區北扇町、大阪市立工業研究所内大阪工研協會）
小野田一正（16後）京城府上道町三五住宅營團住宅第一〇七號
荻阪 操（12）住吉區西今川町四ノ一七

大文

入江 功二（17哲）（寶塚歌劇團編輯係）
神田 孝助（14哲）（天王寺區堀越町一一九、阿部野橋ビル神田商店、計理士）
廣瀨 義雄（5英）（滿洲國治安部大臣官房用度係）

大經

織田 正一（4）（大阪府市場警察署長）
大塚 泰助（16前）奉天市大和區紅梅町日本ペイント社宅
金定 時得（13）名古屋市東區杉村町東分一六四八（名古屋鐵道局）
河野 必（9）佐賀縣杵島郡北方村（明治鑛業西杵炭礦）
小早川 繁（16後）佐賀縣東松浦郡濱崎町濱
小林 稔（14）（日本木材會社）
中島 靖夫（17）（大正區船町七、丸善石油會社大阪第二製油所）
松葉 孝（17）西淀川區浦江北四ノ一六自治寮（日本ペイント會社大阪支店）
松山 勝衛（16後）（野村殖産貿易會社）

大商

川崎 道夫（16前）東京市四谷區荒木町二五、坪井方
清水陽太郎（14）西宮市今津町巽町三一（川西航空機會社厚生部）
田邊由治郎（13）（南區難波新地五番丁、日本電建會社大阪支店）
弟子丸 寛（16前）佐賀縣佐賀郡新北村搦
宮井 禮（16後）奉天市朝日區義光街一段四〇號、宮井誠一郎方
吉松 寛彦（15）（東京市芝區田村町五ノ一四、麻統制會社）

專一法

關矢 一雄（9）（綿ス・フ統制會）
新田 正雄（17）京都府綴喜郡井手町玉水（京都府經濟部商工課）
廣瀨 正夫（9）住吉區萬代西六ノ一四
山田 義康（15）北區曾根崎上二ノ二一小谷方（小谷勝重法律事務所）

專一經

倉田 陽吉（17）（西區本田通二ノ八〇、牛田綿行）
堀江 哲雄（13）（濱口興業會社罐詰部）
松本喜久男（16前）京城府旭町一ノ一〇〇ノ九三、旭寮内（黃金町一ノ九七大日本燐礦會社京城出張所）
三好大八郎（17）（大日本輕合金會社）

專一商

今井 利雄（14）山口縣岩國市今津五本松方二區四七六
岡本 正雄（15）岸和田市積川町一一七（三興會社船場支店機械課）
淡 數男（11）天津河北三經路一四一號（天津居留民團財務部計理課）
辻 義人（13）熊本市清水町室園三四四ノ四
寺田 實（17）（大日本輕合金會社）

專二法

赤尾 武馬（17）山口縣下松市都町六班
淺田 晃（16後）住吉區西田邊町一五〇、岡田隆方

雨村　是夫（5）札幌地方裁判所小樽支部判事）
井上伊和時（15）住吉區鷹合町二三二（法文學部法科在學）
井上　源二（5）京城府旭町一ノ一〇〇（朝鮮端反商組合）
井口　卯平（13）北京市東城趙堂子胡同七、松本克巳方
井汲　直一（5）福井市二ノ丸町七
家本　富夫（6）東京市王子區志茂町一ノ二九四
碇　一夫（11）北海道空知郡三笠町春日臺、幌内鑛業會社）
石井　津義（11）牡丹江市昌德街一三ノ一一（鐵材商）
上辻　敏夫（11）（福井地方裁判所判事）
上村　作一（一四）札幌市大通西九丁目
衞藤　忠雄（一四）（飾磨國民職業指導所長）
遠藤　富雄（15）（滿洲國熱河省喀喇沁右旗公署）
大塚　重延（2）（横濱正金銀行ラングーン支店）
岡田　譽利（15）滿洲國間島省延吉縣圖們街銀河區銀河路參牌壹號、商工金融合作社内
加藤　武夫（16前）（東淀川區本庄東通二ノ五一、加藤商店）
片山多米夫（一四）住吉區北田邊町二一八
川崎　多一（6）滿洲國錦州省阜新市海州區正德街一段一三ノ一
木村　興吉（八）三島郡高槻町常磐町七五ノ一九
清藤　義夫（明45）東成區大今里北四ノ一三四（東成今里郵便局長）
小泉　要三（一四）住吉區昭和町中三ノ五
小泊　六翁（明32）（恩給金庫）
幸崎　一義（一〇）福岡市濱田町二ノ三八
佐藤　孝重（16後）德島縣板野郡應神村東貞方中筋五五
佐野　義春（17）南區心齋橋筋二ノ一六
清水　賢作（9）大津市膳所錦町二一四
澁谷　正俊（五）一宮市川田町五ノ三（一宮區裁判所檢事局）
勢渡　逞男（二）（北海道勞務課）
田村　淺一（明44）（松陰繕神普及會山口支部長）
高砂　治（16前）旭區生江町五九八ノ一、森本一郎方
高淵　滿夫（7）神戸市葺合區二宮町一ノ四（紙布工業會社）
瀧　利幸（10）（姫路漬物有限會社長）
竹谷　太郎（7）西宮市越水町五九（中河内郡加美村松山町二ノ三五、新興鍛造工業所々長）
永原　修夫（2）布施市吉松三八
練屋　寛（5）住吉區阪南町中一ノ三一（大阪市總動員課）
原國　政明（15）天王寺區細工谷町四七
福長　泰章（2）（上甲子園國民學校）
藤川　正吉（16前）北支天津法租界中街七八號、日本海上保險會社天津支店内
藤原保五郎（明43）住吉區田邊東町七ノ六
藤原久之助（明39）住吉區松崎町一ノ四七（タチバナ商會）
三笠　稔（7）滿洲國四平省西安縣西安街中興區三九六（西安地方法院次長）
矢野　平馬（4）東京市葛飾區金町五ノ四（内務省管理局監理課）
山下　勇（12）朝鮮江原道江陵郡旭町二三八（警部補、江陵郡）

專二經

青木　昇（五）北京景山後街近水樓内（東方觀光北京出張所支配人）
伊東　潔（五）大正區南恩加島町五
岡崎　一郎（2）東京市江戸川區小岩町四ノ一四七七
杉本　嚴（8）尼崎市灘波通八ノ九二
瀨尾　永治（五）北京内三區王大人胡同二四
高木　啓（14）兵庫縣武庫郡本庄村青木四七八（本庄村深江、日東航空機器會社）
高橋　實（五）北京東交民巷蘇國使館（華北東亞煙草總務部長）
福本　眞一（3）（磐城セメント會社濟南出張所）
船越　盛人（二）（兵庫縣三原郡濱町長）
山越　外吉（10）（日本貿易振興會社名古屋支店金澤出張所）

專二商

淺沼　彦次（12）名古屋市昭和區瑞穗町上坂二六
伊場　信一（3）（地方事務官、滋賀縣官房局長）
石田　曾次（一五）京都市左京區下鴨宮崎町一二八ノ五三
加藤　克己（三）（哈爾濱市埠頭區買賣街四八、貿易會館内哈爾濱地區自轉車配給統制組合）

改姓名

昭13專一法　金・萬　哲　富・本　萬哲
昭15大法　金・長・松・金・海・和博
昭9大法　三橋・正實　高・橋・正實

訃音

怡上　寛也（昭12專二法）某方面に奮戰中去る十一月十三日壯烈な戰死を遂げられた
上吉川　梁（昭13大商）徐州方面に奮戰中、去る十月八日戰病死され、十二月四日無言の凱旋をされた。遺族南區安堂寺橋通二一六
鈴木　省三（昭13大法）今事變に出征北滿の警備に中支戰線に奮戰次いで比島バタアン半島及コレヒドル島敵前上陸に參加後大東亞戰の花と散られた。
鈴木　正夫（昭9大經）去る十一月七日於大阪陸軍病院戰病死された。
新留　嘉吉（大9專法）去る十月二十日逝去された。遺族鹿兒島縣揖宿郡山川村大山二三三。
藤原　儀行（昭14專一商）去る十一月五日於北滿虎林陸軍病院戰病死された。遺族高松市南新町二ノ七二、父藤原久太郎殿。

校友會費拂込者氏名

◇一時拂（金五拾圓）井上　軒

◇昭和十七年度會費（金參圓）

荷宮　朗　仁熊　士郎　西浦　藍司　西代　通
西川　寛　西口　種男　西田　八郎　西村　貞三
西尾　照雄　新坊　博一　西原　勳　根木　孝
根木　義務　根岸　寛　農士　忠明　服部　正一
服部　弘　滋利　一郎　長谷川銀一郎　長谷川　徹
林　速水　一郎　坂東　敏武　牛田　誠二
畑　茂喜　悦二　早曾　純男　花岡　芳夫　萩田　時彦
板東武三郎　原口　一雄　春名　俊介　林田　昇
林　斌　林田　美春　林　牧　橋本　一夫
橋本　茂明　濱本　守　濱田充四郎　橋本　三郎
長谷　英作　長谷川英次　長谷川善治郎　平野　桂造
平山　敦司　平松　一馬　平瀬慶次郎　平林　健松
平塚　拓治　樋本　安男　樋口　一良　廣本　洪木
藤本　漠　淵崎　孝男　船津　泰基　深田佐次郎
房本仙太郎　福井　通夫　福田　德男　福園　實
福井　治郎　藤田　弘　藤井　茂　藤井　稔
藤岡　英輔　藤井　信雄　藤澤　馨　藤川　廣海
藤浪　德夫　藤原素惠夫　藤本　四郎　藤田　茂樹
堀内　明弘　本田　博　増田　通　眞砂　勝利
眞鍋　守　松岡　巍　丸尾　武彦　丸山　清
前川　義一　前田　隆弘　升岡　榮　柾木　好一
牧　和男　槇塚　正　眞壁　繁雄　増田　牧夫
松井　通夫　松本　昭夫　松元　英一　松永　邦衛
松本正太郎　松田　政行　松崎　正義　松浦　勝英
三宅　良一　三好大八郎　宮崎　秀夫　三谷　正
三國　得夫　三宅　泰二　三浦　博和　三原　茂男
三好　智　道下　一雄　宮崎　友一　宮本　楢
南　正一　宮脇　弘司　宮城　邦夫　水谷　秀一
濱本　辰雄　村上　章　村岸　眞　森谷德二良
森　茂雄　森　道廣　森内　忠次　森山　清止
森　泰雄　森脇　博志　森本　正三　森家　有信
森本　利之　森岡　啓祐　森　一之　毛利　淑彦
本井　明郎　許斐　茂明　許村　勇臣　山口　義爾
山根　賢藏　山根　寛藏　山本　昇一　山本　仙治
山本　隆次　山本　敏躬　山本　宏　山田　敏雄
山根　房人　柳川　弘　山口　忠一　山本　拓司
山本　敏夫　八木　優　山本　隆業　山田　實
山田　三好　山田　繁　山田秀太郎　山崎　洋　安田　忠嗣
矢切　誠三　矢野　和彦　矢野　秀治　八尾野　滿
社　通信　柳澤　明　柳生　恒夫　雪廣　泰一
藪田　次男　八木　正道　雪本　修造　吉田　達
湯川　春雄　吉田　弘雄　吉田　晃　吉永　敏夫
吉田　禮助　吉岡　藤三　吉岡　藏　吉村　清三
吉川　一男　吉山　南吉　吉川　幸雄　横田　宏一
吉村　清三　吉井　功男　横田　義輝　横山　優
横山　亮一　横臼　晋　牛田　義輝　米澤　俊夫
和田　之男　渡邊　朗　渡邊　道男　渡邊　洋
渡邊　文彦　渡邊　俊三　瀬島　渉　勝原　睦夫
泉　良輔　關口　昇　柴田　五郎　木原　繁義　田代　信清
紺家　稔　笠井　和夫　千原　啓治　木下　保夫　村上源治郎
小島　利夫　山本喜代三　守屋　茂　赤口　秀德
三毛　敏治　南　一男　堀口　正輝　山田　良男　泰永　茂
平野　政夫　中野　敏一　島井　三郎　藤田　和男
高時　保　坂田　文治　岸田榮三郎　津田　筭平
今中喜二郎　井上　清　仁木庄三郎　瓜生田　圓
田方　重雄　井尻　義一　添田　一秋　小寺　正武
仁子　祥　濱部　一男　福岡　三夫　田中　茂
吉田宇平治　近田　唯志　神馬　恒一　藤居　誠雄
井上　清　宮崎　淳　三野　藏　藤田　邦文　諏訪　次郎
中野　周一　淺野　正雄　井澤　義男　怡土　寛也
飯田　昇　池田　忠雄　石黒　純　乾　義雄
今井　輝夫　宇喜多景家　遠藤健次郎　越知　昌治
大川　三三　大西　政吉　大峯　正雄　大村　喜覺　清
木藤精一郎　久保　金一　熊澤大五郎　雲井
倉知　修　齋藤　功　小岸　安昌　小山　市藏　近藤　常吉
鈴木　正義　高木龜太郎　坂室　信一　雀山　芳一　諏訪富三郎
谷川　康衛　塚本　國雄　高見　壽之　瀧　重貞
富本　萬哲　中井　勝　戸部　智夫　德田　高二
成田　博　西田　貞雄　中田　豐雄　中務　平吉
橋本　好三　濱田榮次郎　西野　義輝　唄　彌一郎
藤井　淳二　鮒子田繁太郎　平田　勉　福井　良一
日吉　三木　三宅　六郎　宮村　利雄　松田常太郎　松本　弘　門谷　壽郎
八木萬太郎　矢野　義一　山口　清　山本　貞範
山本　博亮　山本宗太郎　吉本　節　塚本　康雄
荒川虎一郎　臼井　要三　屋形　旨正　大野　矩雄
岡村　光雄　柿ヶ原秀實　川野　勳平　小平彦太郎
小竹　勇吉　小林　英次　鹽見　利夫　下井豐太郎
鈴木　重親　寺島　由松　福井　富三　牧野　成道
松田彌宗治　松原　清史　南　章太郎　山口　九郎
阿部　禮治　足立　喜道　秋山　謙吉　伊藤　岩吉
井崎　政壽　石原　正義　今田　魯勸　氏田　洋
植村久太郎　尾下　瀧雄　小河　貞夫　岡本　勝治
笠原　重義　勝村　磐　川田　廣一
香西　政一　小寺善二郎　小林　俊雄　佐藤　丈夫
川瀨　衛　菅根　正治　田中　義一
白川　義雄　炭山　巖　高山興志己
多田　米藏　高山　龍夫　高谷　辰雄　西辻　藤一
玉井　磨輔　伸島　忠次　中山　秀次　樋口　禎亮
野間　豐　瓦木　眞市　島　武之助　眞鍋竹治郎　松岡　行雄
船越　信勝　古川　親　前田　秋隆　溝口　義章
松原　健一　的場　武次　森川　利雄　森繼　禎次
村山　壽行　村山　正純　山田善之助　山内喜八郎
八尾壯比古　山中　信夫　荒川　照清
領内正太郎　平田喜一郎　芦　傳
秋山　米藏　赤木　輝夫　朝田　良一　安藤伊重郎
井川貞次郎　飯盛　秀心　井倉　二郎　伊藤　元
猪飼永太郎　今井　隆久　生野　次郎　藤　隆一
一本　正光　稻井　義夫　石井　潤治　岩井　秀一
岩窪　一雄　入江　寅一　石躍　重之　鶴飼　慶一
上村　敬之　上杉治三郎　上田　利夫　浦田關太郎
今村　良一　江畑　三郎　大江　弘次　大白　愼三
小川　重治　太田　正春　大月義平二　奥澤　澄
奥野　正己　大木　幾馬　江里口春志　小野田正孝
小倉　清助　小野村胤敏　尾崎　正三　尾崎　正弘
大塚甚三郎　大畑　只一　岡野重三郎　岡部　庄次
岡本　直正　岡田　退一　奥西　茂樹　鑓尾　豪雄
樫原　實　片岡　國夫　勝田　章　勝原　博三
金田　美作　金星　武三　兼吉　晃　辛島　甫
木村　滋　木村　昌治　木村　仁吉　木下　定次
木原　仙次　菊池　文吾　北坂正三郎
貫治　義雄　銀島　萬作　久門　商利
北村　貫正　衣笠　峻夫　國平　利一　黑田　貞雄
倉内　芳雄　補部　保　小林　康寛　小林　文雄
桑田　乍作　小寺　喜一

中島宮春　中尾重保　中村武治　中島久綱　中井哲彌　西萩俊穂　兒玉善吉　後藤德太郎　佐藤掬水　清水萬次　塩田好一　須藤克巳　須々木庄平　田中愼二　多田時造　高橋忠次　瀧井義男　武氏英二　葛田博史　名越民次郎　中井繁　中島藤一郎　長手米吉　西川勘二　橋本民三郎　原田等　蛭子井義夫　古木健夫　藤波一治　藤田實雄　木田由雄　前田計元　松本信次　三橋國松　三輪忠邦　宮本嘉藏　村田捷太郎　森岡正典　森下龜太郎　柳川茂十郎

仲善治　中野達生　中原勝　長田軍弘　成瀬國十四　仁興滿雄　後藤種吉　幸崎一義　佐藤芳太郎　四郎　芝野　鹿村富久　嶋村嚴　柴田謙二　菅原一夫　妹尾光恭　田中久雄　大道寺慶男　高濱信男　竹西宗助　谷村武雄　寺井愈一郎　内藤政雄　中尾宣雄　中嶋常雄　仲野富祥　錦保一　畑孝二郎　濱田榮三郎　東野清太郎　福田斌　福井由吉　藤本清　堀内新一　松川孟一　松村源治郎　松本正寛　三木啓志　宮内大三郎　村中新一　室谷忠夫　森大三郎　森下政一　宮崎秀夫　村田定市　岩岸巖　上田榮治郎　梅原眞治郎　小倉良造　大内孟

中谷義雄　長田安弘　長田清二　中谷茂樹　西畑繁　仁頃廣次　後種新治　長濱行治　嵯峨根令　櫻井右之助　篠崎有音　新海泰三　鈴木平吉　田中誠逸　多羅尾敏夫　高木實　高尾省三　竹内正治　武田木曜　辻本幸臣　德田重義　島巢新一　中井嘉市　長岡實　中村敏雄　中村源次郎　西野義輝　畑義博　灰井正二　樋口悦造　古田吉五郎　藤澤靖彦　藤高豐作　兵頭正隆　前川美知　松本芳太郎　丸山喜三造　三島俊彦　宮本萬里　村田定市　森景京一　森下政一　柳澤芳雄　山村善五郎

中江正雄　中川政春　内藤豐昌　中島顯文　西山廣美　西岡露　後藤田源之助　國分吉廣　櫻井右之助　篠崎有音　新海泰三　鈴木平吉　宇喜多永康　古座成夫　岩谷寅治　前田惣一郎　永見房吉　塚本利三郎　青木太郎　赤城浩朗　河本繁三　田中誠　林利弘　清野卓　遠竹徹　森健　石井芳雄　木下清　黒田隆一　酒井潤三　澁谷敬治　小川重治　辰馬慶次郎　大槻信保　小谷常英　谷坂正一　德竹清一　藤本卯吉　赤城浩朗　東良次郎　石井平　今西貞夫　今井盛五　今西貞夫　村田善次郎　伊藤敷雄　織田信照　小林一二　藤川正吉　本郷一臣　前田瀧造　松岡爲吉　松村作二　三宅信太郎　三宅豊之　宮地武　守安恒　山越外吉　山根大治　井口卯平　向井裕亮　矢野一之　山下重彦

山口武雄　湯朝龍圓　石田眞一　下野大七　芦田喜太郎　石田清俊　木村駒吉　生島藤藏　中村健次　笹田英男　山下勇次　中谷顯一　藤田貫次　南部清和　札野茂次　眞島茂　鈴木友一郎　木下正一　田中壽八郎　永野忠義　大橋展昭　小倉良造　崎谷三郎　田中又三　田中政三　岩朝太郎　林利弘　清野卓　永田信明　森健　石井芳雄　井上三男　黒田隆一　澁谷敬治　棚瀨純　中村守　杉浦恂太郎　青木四郎　東正實　井上芳比　板垣進吾　岩越賢　宇治田尚敬　江川傳次郎　小野元亮　大柏清三郎

山崎伊作　油谷英一　三木甚太郎　安藤永一　泉正雄　中村榮　生島藤藏　中村健次　笹田英男　中谷顯一　福谷長治　山形春雄　高鳴季明　佐々木敬　巽精造　飯島茂平　藤本浩一　荒木達實　平野國正　淺沼猪助　桐本晴光　柴田士　和田俊逸　赤星博典　村田善次郎　伊藤　織田信照　小林一二　谷坂正一　德竹清一　武雄　藤本卯吉　赤城浩朗　東良次郎　石井平　今西貞夫　嚴本哲兒　畝田耕一　小川喜志雄　越智唯七　大先一成

沖井大三　吉田虎雄　吉野慶三　渡邊保一　平田榮福　石田金次郎　木村榮　佐々木森康　藤野剛三　山口德隆　佐野年彦　堀本賢俊　高鳴季明　佐々木敬　桂井新一　山田節士　藤本浩一　竹内建雄　谷口義正　近松正雄　桐本晴光　柴田士　崎谷三郎　高木啓　長崎政道　久保田利夫　田窪義孝　川邊鹿之進　高木啓　西川留太郎　淺沼猪助　越智唯七　佃善三郎　中嶋保　新田正雄　西川大治　西村三男　原仙吉　東山政夫　平山和男　福島勇　藤川正吉　本郷一臣　前田瀧造　松岡爲吉　松村作二　三宅信太郎　三隅正夫　宮島基河　村田與次郎　梁本基夏　山口正夫　山下正夫　若松四四雄　小野三曹

湯淺直行　吉村泰助　渡邊保一　平田榮福　石田金次郎　木村榮　佐々木森康　藤野剛三　山口德隆　佐野年彦　堀本賢俊　高鳴季明　佐々木敬　巽精造　飯島茂平　藤本浩一　竹内建雄　谷口義正　近松正雄　柴田士　和田俊逸　杉本嚴　勢渡逞男　田中又三　高木啓　竹内美太郎　谷田晶十郎　津川彌三郎　弟子丸寛　中島寛二　西尾好道　西川留太郎　西田準二　林貞雄　東田博雄　平野國正　福島勇　藤井正男　別役金之助　茂　保延　正木俊一　松谷連哉　三木忠章　水野忠義　向井裕亮　矢野一之　山下重彦　山根大治　井口卯平　木村基

大塚重延　太田勝一　奥山直武　梶野宗一郎　川邊鹿之助　清野卓　小崎司郎　小林壽夫　近藤隆　櫻根武夫　崎谷三郎　清水辨二郎　菅雅行　鈴木新太郎　田口誠　田村寛　高橋豐治　竹谷太郎　辻數文　塚本猶治郎　中井義友　長崎政道　西川一行　西濱信夫　林利弘　東田博雄　平野國正　福島勇　藤井正男　別役金之助　茂　保延　正木俊一　松谷連哉　三木忠章　水野忠義　向井裕亮　矢野一之　山下重彦　山根大治　井口卯平　木村基

大塚泰助　岡本四郎九　温品正雄　桂定一　河崎隆常　河本繁三　久保田利夫　五島守　佐藤嘉一郎　篠山幸一　崎谷三郎　清水辨二郎　篠田忍成　菅沼廉導　鈴木良助　田中政三　田村寛　高橋比左也　谷岡拓磨　辻數文　塚本猶治郎　中井義友　長崎政道　西川一行　西濱信夫　林利弘　東田博雄　平野國正　福島勇　藤井正男　別役金之助　茂　保延　正木俊一　松谷連哉　三木忠章　水野忠義　向井裕亮　矢野一之　山下重彦　山根大治　井口卯平　木村基

岡田磬利　沖汐四朗　加藤武夫　川崎多一　河本繁三　久保田利夫　小泊六翁　小林和一　近藤賢次　佐藤恒雄　篠山幸一　篠田忍成　菅沼廉導　鈴木良助　田中政三　田村寛　高橋比左也　谷岡拓磨　辻數文　塚本猶治郎　中井義友　長崎政道　西川一行　西濱信夫　林利弘　東田博雄　平野國正　福島勇　藤井正男　別役金之助　茂　保延　正木俊一　松谷連哉　三木忠章　水野忠義　向井裕亮　矢野一之　山下重彦　山根大治　井口卯平　木村基

岡野衛士　奥田正男　笠屋憲夫　川崎道夫　木下宏　栗須一　小林和一　近藤賢次　佐藤恒雄　篠山幸一　篠田忍成　菅沼廉導　鈴木良助　田中政三　田村寛　高橋比左也　谷岡拓磨　辻數文　塚本猶治郎　中井義友　長崎政道　西川一行　西濱信夫　林利弘　東田博雄　平野國正　福島勇　藤井正男　別役金之助　茂　保延　正木俊一　松谷連哉　三木忠章　水野忠義　向井裕亮　矢野一之　山下重彦　山根大治　井口卯平　木村基

(以下次號)

關西大學教授
經濟學博士　正井敬次著

國民經濟原論 ＝

國民經濟組織論

定價二・〇〇
送料　・二〇

新刊

序　本書國民經濟組織論は著者の意圖に於ける「國民經濟原論」の第一篇「總論」に當る部分を右の如くに名付けて之を單行の一論著とせるもの。國民經濟原論の名の下に、經濟學の一般的基礎的理論を研究せんとする場合、如何なる體系と内容とに於て之を試みるべきやは甚だ困難である。とは謂へ、著者の意圖に於ける、之を單なる市場經濟理論として取扱ふことに滿足せずして、專ら國民經濟原論と云ふ意味に於ける理論として取扱つた點、新らしい經濟理論への一示唆を與ふるものである。

神戸商業大學教授　丸谷喜市著　價三・〇〇　〒・二〇

價値及價格研究班

三版出來

著者の言葉――經濟人と經濟學者の心はいま專ら政策乃至實踐の問題に向けられてゐる。時代の潮が極めて急速且つ雄大に動くとき、之は當然のことである。それに付けても基礎的、理論的研究は一日も忽にすべきでない。

東京帝大元教授　矢内原忠雄著　價二・五〇　〒二〇

帝國主義下の印度

五版

植民地の社會的發展の一切は統治國の植民政策に依りて、一定の方向に或は促進せられ或は限定せられる。而して印度は世界最大の植民國として大きな話題を提供する

黄警頑著　大川周明序
左山貞雄譯

華僑問題と世界

南方經綸に當り英蘭支配階級と原住民との間に根強い中間的經濟的勢力を有してゐる華僑の問題は今まで之を世界的規模に於ても把握すべきであらう

價一・八〇　〒・一五

大阪市梅田北新道區　大同書院　振替大阪二三一九七